

この播かれた教えが大きな輪となって広がるのが、岸田武男が渡米した昭和二十五年（一九五〇）のことである。

さて、昭和十三年（一九三八）の秋には『日本精神 家の尊重』と題する小冊子が刊行された。家を尊重する精神を土台として生まれる個性や個々の人格をも大きな生命の中につつま、そのなかで生かす無私の精神、没我歸一の精神こそが「日本精神」そのものであることを説いたものである。聖憲が常日ごろ説いている日本精神の顕現による国民精神作興への道筋をより具体的なものとして説いたことになる。

この小冊子は、長野県支部から松本陸軍病院の戦傷病兵に対する慰問品として寄贈されたりもした。こうした解脱会の活動が同年秋に帝国軍人後援会総裁宮から、有功徽章・銀盃の一組の下賜というかたちで、公に認められたことは特筆すべきこと

であろう。

昭和十四年（一九三九）八月にソ連との不可侵条約を結んだドイツが九月にポーランドへと進攻をはじめ、第二次世界大戦が勃発した。日本では日米通商航海条約が破棄され、米国からの様々な物資が輸入できなくなっていた。戦況は深刻化しつつあった。

しかし、翌十五年（一九四〇）が皇紀二千六百年にあたる国内は、「紀元二千六百年祝典」を催すための準備が進められていた。聖憲はこうした節目の年こそ、日本国にふさわしい内実をつくり上げるべきであると考え、昭和十四年一月に刊行された『大日本精神宗教』である。前半に「大日本精神」を説き、後半に「国家と解脱」、「社会と解脱」、「家庭と解脱」といった段階を追った、「解脱の大道」を記している。そして、六番地に近い土地を購入し、あらたな道

場を建設することも、その一つであった。

また、昨年から制定の動きがあった、「宗教団体法」が四月に公布されると早速、聖憲は、解脱会を「解脱報恩感謝会」として登録をした。このことは、真言宗醍醐派の分教会として制約を受けつつ活動してきた解脱会が、独立した宗教団体として自由に教えを展開し、活動していくことができ、それを意味している。

そして、聖憲は皇室の唯一の菩提寺である、泉涌寺を護持するための準備にとりかかった。聖憲には、泉涌寺と天照大神を祀る伊勢神宮、神武天皇を祀る橿原神宮の二つを合わせた三聖地巡拝の心積りがあったからである。そもそも泉涌寺は「拝観謝絶」が山規としてあり、初めから上手く運ぶ話ではなかったが、聖憲の熱意は護持の実績をあげることで可能となる道を探したのであった。

富士に祈る 63

國學院大學兼任講師 城崎 陽子

信仰と伝承 — 岡野聖憲・その17 —

先回は、日本が盧溝橋事件を契機に戦争への道を歩み始め、その時流の中で、解脱会の活動そのものも変化を余儀なくされ、聖憲が「霊修業」の中止を会員に通告したまでを記した。今回は、戦局が深刻になるなか、聖憲はこれを日本精神作興の好機ととらえて、会員への説論につとめ、三聖地巡拝実行への目途をつけるまでを記す。

昭和十一年（一九三七）七月の盧溝橋事件以降、日本軍の大陸における戦局は深まっていった。そのような世相の中にあっても、変わらず秋季大祭は行われた。特にこの度の大祭では、聖憲の急告によって「皇軍出征戦病死者之霊」と「太古以

来軍馬犬鳩之霊」の供養とともに「太古以来敵味方無縁一切之霊」として敵も味方も供養していくという姿勢が示された。

一方、真言宗醍醐派解脱分教会として、早急に会の活動を変更しなければならぬ。聖憲は月報の体裁を改めることからそれをはじめた。「修験実証」を巻頭に掲げ、「勤行法則」の他に、醍醐派の教理に基づく記事が掲げられた。そして、一年にわたって「般若心経」の講義を連載した。また毎月、醍醐派の修験道庁に登庁することにもなった。しかし、勤行が変わろうと名称が変化しよう、解脱の教えの根本に何ら影響はないというのが、聖憲の確固たる信念

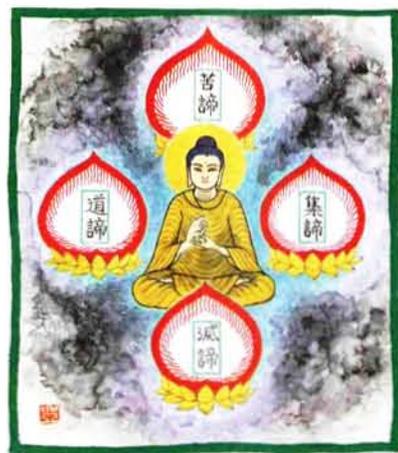
であった。また、国民が一九二〇年になって国家の非常時に向かい、「国民精神総動員」という方向性が生まれて来る今こそ、国民精神を作興し、本来の国体を作り上げていく機会だと確信していた。聖憲自身が毎月修験道庁へ登庁するようになるのにあわせて関西や名古屋の支部への出張が行われるようになった。これは、各地域の会員の活動が会長を中心として一体化することを意味しており、全国の会員が一丸となって活動する体制が整っていった。

ところで、昭和十二年は解脱の教えが米国に播かれた年でもあった。結婚を機に渡米していた清田イネが、故国への思い断ち難く、一時帰国をし、六番町へ通うことになったのである。そして、半年間会長の教えを受け、再び渡米した清田は太平洋戦争下において收容所を転々としながらも解脱の教えを説いたのである。



泉涌寺大門（解脱会提供）

く 苦集滅道四聖諦を説く



絵・橋本豊治



句・菅谷秀文 28

苦諦とは、人生は苦しみにあふれており、思い通りにならないことを知る。

集諦とは、苦をもたらし原因である、心の汚れを観察する。

滅諦とは、苦を滅すれば、心の平安を得られることを知る。

道諦とは、苦を滅するための、実践方法が存在するということ。

四聖諦とは、四つの聖なる真理を言う。